

2020年4月26日(日)

老球の細道537号

日本バスケットボールのルール変遷史①

会津バスケットボール協会 室井 富仁

毎日コロナ感染者数の変遷をテレビで見ながら一喜一憂している。ちょっと前までは、Bリーグ・ディレクターの仕事をしてながら福島ファイヤーボンズ・ホームゲームでの観戦者数に一喜一憂していたのに皮肉な運命である。東日本大震災時は「絆」を合言葉に皆が近づこうという雰囲気だったが、今は「ソーシャル・ディスタンス」で皆離れようとなっている。これもまた皮肉なことである。外出自粛の折、皮肉なご時世に負けず、ぜい肉がつかないよう、筋肉をつける運動をするしかない。何を言っているかわからないので本題に入る。

バスケットボールは当初、わずか13条だけでスタートした。現在は50条の規則にたくさんの項目を含む詳細なルールによって行われる、近代スポーツの中で最も複雑なルールを持つスポーツである。その証拠に、ゲームにおいては、狭いコートで、たった10人で試合が行われるのに、3人の審判と4人のT・Oによって裁かれている。

当初はシンプルだったルールも、時代とともに、技術の進化とともに変遷を遂げて現在に至っている。我が国においては、1930年(昭和5年)に「大日本バスケットボール協会」が結成されているが、当初はアメリカン・ルールに基準をおいていた。それが1952年のヘルシンキ五輪後のFIBAのルール改正、ならびに日本の国際交流の増大に伴い、1957年(昭和32年)から国際ルールを全面的に採用して現在に至っている。

『バスケットボールの歩み・日本バスケットボール協会50年史』(私は1981年原町高校教員時代に取得)によると、協会創設から50年間(1980年まで)の日本バスケットボールのルールの変遷を3つの観点でまとめられている。

1・長身者対策

バスケットゴールが高いところにある限り、長身者が有利である。その有利さを少しでも防ぐために次のようなルール改正が行われた。

*3秒ルールの設定(1933年・昭和8年)

*フリースローレーンの区域が鍵の穴形(キー・ホール)から長方形に変化(1955年昭和30年)。その後、1957年(昭和32年)以降は台形に変化

フリースローレーンの区域が広がったことにより、長身者は動きの激しいポストプレイ、オールラウンドのプレイができなければならなくなった。郵便ポストのように突っ立ってプレイしたことから命名された「ポストプレイ」のイメージは徐々に変化していった。

*攻撃・防御側のバスケットインターフェア(1957年・昭和32年)設定

フリースローレーン内にいる攻撃、防御プレイヤーは、シュートやパスのボールが落ち始めてからボールがリングより上にある間に、そのボールに触れてはいけないことになった。蛇足：1936年ベルリン五輪時に日本はFIBAに「身長制」ルール導入を申請。(続く)